

三つの視点

菅原伸郎

南無
善財

昨年の秋、千葉市中央区にある浄土宗大蔵寺の境内に「学問之碑」という小さな石碑が建てられた。こんな文章が刻んである。

《福祉と宗教と平和が 生涯の願いであり 私の学問研究のすべてであります》

吉田久一・日本社会事業大学名誉教授の信条であり、私たちにいつその精進を促している。社会福祉と近代仏教の思想史を研究し、二〇〇三年には仏教伝道協会から仏教伝道功労賞も贈られた方である。

しかし、主役である先生は除幕式の一週間前、十月十六日に九十歳で

亡くなっていた。そのときは告別式がなく、あらためて一月末に「お別れの会」が東京で開かれた。福祉や学校の関係者ら約二百人が参列したが、挨拶に立った人たちはいずれも先の「福祉と宗教と平和」という三つの視点を挙げていた。まさにご生涯のすべてだったからである。

吉田さんは一九一五年に新潟県高田近郊の山村に生まれた。旧制中学では全校ストライキのリーダーにさせられ、そのあとは大正大学仏教科に進んだ。「より平和に近い大学

を」という思いからだった。在学中からスラム街の救援活動に参加し、福祉事業の実状や歴史を調べるようになる。『日本社会福祉思想史』（吉田久一著作集1、川島書店）など、数々の著作の行間には福祉政策の貧困さへの怒りが読み取れる。

巢鴨女子商業学校の主事だった一九四三年、一兵卒として召集された。満州に渡ったが、翌年夏には沖繩・石垣島の守備隊へ転属となる。上官にいらまされながらも島民と交わり、少壮の学者として民俗や歴史を調べて回った。空襲とマラリアに悩まされて過ごした一年半の日記は、五三年に『八重山戦日記』（九九年に復刊、ニライ社）として刊行された。後記には《私達世代はあの戦争

を批判の場としながら、後半生を歩み続けるだろう」と書いてある。

仏教への関心は、故郷・越後の母上が熱心な真宗門徒だったこと、大学時代に矢吹慶輝門下として学んだこと、そして福祉研究の必要からだったろう。『清沢満之』（吉川弘文館）や『近現代仏教の歴史』（筑摩書房）などは、啓蒙書として読みやすい本だ。中年の新聞記者だった私も、書店で見つけた『現代仏教思想入門』（筑摩書房）で、福田行誠や妹尾義郎といった先達の原典を初めて読んだものである。

とはいいながら、八十八歳で出版した『社会福祉と日本の宗教思想』（勁草書房）の序文によると、自身は「信仰」と呼ぶものを持たなかつ

た。沖縄の戦場や、六十代で体験した大病も「どちらでも自分の力で生還したとは思えなかつたが、それによつて、「信仰」の機縁にはなっていない」と振り返っている。死地からの奇跡的脱出はむしろ、先輩や同僚や教え子ら、周囲の「友情」のおかげだった、という。

研究者として特定宗派に縛られたくなかつたのかもしれないが、そうではなく、仰ぎ見る対象も宗教的体験もたしかなかつたようだ。そし

て、「恐らく「回心」は、強烈な

「個」に恵まれなくては不可能なのであろう」と書いていた。となる
と、阿弥陀仏が一切衆生を救わないこともありそうに思えて、私は少し心配になった。世の辛酸をなめ、仏法を深く学んだ方の告白だけに、この問いはなかなか重いのだ。晩年、東京・大井町のお宅に伺う機会を何度か持ちながら、その点をお尋ねしなかつたことが悔やまれる。

ともあれ、「学問之碑」に刻まれた「福祉と宗教と平和」という三つの視点は、とかく社会の問題に無関心な仏教者には気になるはずだ。信仰を持たなかつた方さえもが、生涯の課題とされたことなのだから。

（すがわらのぶお／東京医療保健大学教授）

